構造改革特別区域計画

1　構造改革特別区域計画の作成主体の名称
　北海道深川市

2　構造改革特別区域の名称
　北の大地の清酒製造体験特区

3　構造改革特別区域の範囲
　北海道深川市及び北海道上川郡上川町の全域

4　構造改革特別区域の特性
（1）自然条件・歴史的特性

深川市は北海道のほぼ中央に位置し、東西 22km、南北 47km、面積約 530 ㎢となっており、町の北部から南に雨竜川が、南部を東西に北海道第一の長流である石狩川が貫流している。この両河川を中心に両翼に開ける平地に市街地と農耕集落が形成されている。気候は、やや大陸的で北海道内都市の中では中庸を示し、年間平均気温は 6.5℃で、冬季は-7℃前後、夏季は 20℃前後と冷涼な気候となっている。年間降水量は1,022mm と比較的少ない地域である一方、降雪の累計が 1,029cm と雪国の特徴を有する。

1892 年に、北海道庁令により雨竜郡深川村が設置され、1918 年に町制を施行。1963 年には隣接する 4 カ町村（深川町、一巳村、納内村、音江村）が合併し、深川市が誕生した。さらに 1970 年、多度志町と合併し、現在に至っている。

上川町は北海道のやや東寄り中央部に位置し、東西 36km、南 45km、総面積約 1,049 ㎢で、全国の市町村の中でも 8 番目の広大さを誇る。深川市と似た気候である上川町は、年間平均気温が 5.3℃で、冬季が-8℃前後、夏季が 20℃前後、また、年間降水量 1,130mm、降雪の累計 948cm となっている。

松田市太郎や松浦武四郎らが和人として初めて大雪山系を探索し、1857 年に温泉を発見し、その後、層雲峡温泉と改称された。1924 年に石狩国上川郡愛別村（現愛別町）から分村し、上川郡上川村が誕生。1952 年に町制を施行し、上川町となり、現在に至っている。

上川町は石狩川の源流の最上流域であり、その下流に深川市が位置している。両自治体は石狩川流域としての関係性を有する。

（２）人口

深川市の人口は 1970 年の 38,373 人をピークに、2020 年には 20,083 人と 48%減少。2020 年に策定した深川市まち・ひと・しごと創生人口ビジョンにおいては、2040 年の人口を 15,000 人程度に維持することを目標に掲げている。

上川町の人口は 1960 年の 15,289 人をピークに、2020 年には 3,502 人と 77%減少。2020 年に策定した上川町まち・ひと・しごと総合戦略においては、2040 年の人口を 3,000 人に維持することを目標に掲げている。

両自治体とも今後、少子高齢化が進み、人口減少による影響が一層深刻化することが懸念される。

（３）産業・観光

深川市は農業を基幹産業としており、石狩川と雨竜川の流域に広がる肥沃な土壌と大陸的な気候により、道内有数の稲作地帯となっている。深川市を管内とする JA きたそらちの水稲販売額は北海道第 1 位で、全国最大規模を誇る穀類乾燥調製貯蔵施設や低温倉庫、最新鋭の精米施設を整え、日本穀物検定協会の最高位「特 A」に輝く「ゆめぴりか」「ななつぼし」「ふっくりんこ」のうるち米のほか、「吟風」「彗星」「きたしずく」といった酒米を全国へ供給している。

観光面では、地域の自然と産業を生かした観光を推進しており、拠点となる「道の駅ライスランドふかがわ」には毎年 100 万人近くの観光客が訪れている。地元の農畜産物や加工品の販売のほか、レストランでは深川産米を使用した釜飯等のメニューを提供するなど、アンテナショップの役割も担っている。

上川町の産業は、宿泊業、飲食サービス業が就業者ベースで全体の 26%を占めている。農業も重要な産業となっており、もち米、そば、野菜類の栽培のほか、乳牛、肉牛、豚の肥育に取り組んでいる。

また、2017 年には大雪山系から湧き出る清流を仕込み水とする「上川大雪酒造株式会社 緑丘蔵」が北海道 12 番目の清酒製造場として誕生し、緑丘蔵が製造する純米酒は、札幌国税局主催の 2020 年度新酒鑑評会で金賞を受賞するなど、品質の高さが認められ、年々知名度が向上している。

観光面では、大雪山国立公園の雄大な自然に恵まれ、森林面積が町全体の 85%を占めている。特に知名度の高い温泉資源については、層雲峡温泉、愛山渓温泉、高原温泉の３つの温泉地を有し、その中でも層雲峡の渓谷にある層雲峡温泉は道内有数の規模を誇る温泉街を形成しており、町内の着地型観光に大きく寄与している。

（５）地域づくり

深川市内にキャンパスを置く拓殖大学北海道短期大学は、従来から農場公開デー、農業セミナー、研修農場で収穫された農産物の安価販売等の市民に開かれた各種イベントを開催しており、市内外の多くの方が同短期大学を利用するなど地域の活性化に寄与している。同短期大学では２学科で約 400 名の学生が学んでおり、その中でも道内短期大学としては唯一の農業系学科である農学ビジネス学科環境農学コースは、4ha の農場や加工室、研究室等を整え、酒米を含めた水稲の栽培実習を行っているほか、北海道で唯一栽培可能な黒米品種を開発するなど高度な研究教育が行われており、農業後継者や農業関係技術者を多数輩出している。

こうした取組は、第二期深川市まち・ひと・しごと創生総合戦略で掲げる人口減少に負けないまちづくりに貢献するものであり、市としても同短期大学に学生確保対策経費の助成を行うほか、種々の官学連携を検討している。

上川町では、第二期上川町まち・ひと・しごと創生総合戦略において、地域資源や特性を活かした雇用創出や地域活性化に取り組んでおり、前述の重要な地域資源である上川大雪酒造株式会社等と、平成 30 年に地域活性化に関する包括連携協定を締結している。同社は日本酒を通じた地域振興を検討しているほか、大雪山連峰を望む丘に広がる観光拠点「大雪 森のガーデン」内に設置されているカフェ・レストランを同社のグループ会社が運営するなど、上川町が抱える山岳リゾート地としてのブランド化、交流人口並びに関係人口の増加を見据えた様々な取組を行っている。

両自治体は、「あさひかわ観光誘致宣伝協議会」の構成員として共に活動しており、深川市の持つ優良な酒米、道の駅や農学技術者、上川町の持つ酒造会社や温泉をはじめとする観光資源に焦点を当て、両自治体を結ぶ観光旅行の商品化等による地域の活性化について検討にむけた情報交換等を行っている。

５　構造改革特別区域計画の意義

深川市内に体験製造場ができることで、道の駅を中心とした観光施設から市内への誘致効果が得られる。第五次深川市総合計画「ふかがわ未来創造プラン」では、周辺自治体とも連携した観光振興を進めており、本特例措置の活用により、深川市の観光事業が促進される。

上川町は、深川市に体験製造場ができることで上川大雪酒造が製造する清酒の魅力について、製造体験者等への情報発信を行うことで関係人口の創出につながるとともに、短期大学に在籍する教授陣から水稲栽培、農業の知見を得ることで、より高品質な清酒の製造が期待される。第十次上川町総合計画では、

外部からの知見やノウハウ、人材等を活用したまちづくりを進めており、本特例措置の活用により上川町の地域ブランド化の推進が促進される。

以上のことから、深川市、上川町それぞれの強みを生かし、地域活性化や交流人口の創出を目指すことで人口減少に負けない活力あるまちづくりにつながるものであるため、本計画は大変意義深いものである。

6　構造改革特別区域計画の目標

本特例措置の実施を通じ、短期大学やJA、酒造会社の杜氏等の様々な事業者が連携して体験製造場を運営することで、両自治体を訪れる観光客をはじめとする様々な対象者への周知広報を行い、清酒製造体験者数の増加を目指し、この波及効果を両自治体の観光入込客数の増加につなげる。

また、両自治体には道立高等学校が設置されているが、人口減少、少子高齢化を背景に募集定員割れの状況が続き、人材の確保・育成が急務となっている。そこで本特例措置の実施と併せて農業体験プログラムの実施や高等学校向けの校外学習受入れ等を実施することで、農業に関心を持つ方の増加を図り、実践的な農業人材の育成に繋げる。

7　構造改革特別区域計画の実施が構造改革特別区域に及ぼす経済的社会的効果

（1）観光入込客数の増加

深川市は通過型観光、上川町は滞在型観光の入込客数が多く、こうしたそれぞれの強みを生かしつつ、体験製造場と既存の清酒製造場が連携して両自治体双方の情報を発信することにより、着地点の異なる観光客の相互誘客が促進されるとともに、両自治体の知名度のさらなる向上に寄与する。

また、民間事業者や教育機関のノウハウも生かしつつ、農業体験プログラムやワーケーション等の事業を併せて展開することで、まちに足を運ぶ動機付けを創出し、新たな観光客の増加が図られる。

（2）持続可能な農業に向けた体制構築・人材育成

杜氏や蔵人等の技術者や酒米原料及びその生産者の確保は、持続可能な農業を進める上で重要な要素である。

本特例措置の活用により、両自治体の高校生を中心に農業や酒造りの魅力を伝えることで、農学の専攻を志す学生の増加に寄与し、もって両自治体の農業や酒造に従事する人材育成につなげる。

また、製造体験を契機として増加する観光客等により両自治体内の清酒購買、消費が促進されることにより、JA きたそらち管内の酒米作付面積の増

加につなげる。

【数値目標】

区分	R2 年度 実績	R4 年度	R5 年度	R6 年度
体験製造場における実習・体験者数（人）	0	500 人	1,000 人	1,500 人
観光入込客数（人）	1,468,000	1,768,000	1,994,000	2,220,000
（深川市）	(916,000)	(1,068,000)	(1,144,000)	(1,220,000)
（上川町）	(552,000)	(700,000)	(850,000)	(1,000,000)
地元大学における農学学科入学者数（人）	172	178	178	178
JA きたそらち管内酒米作付面積（a）	1,479 (R3 見込み)	1,650	1,650	1,650

８　特定事業の名称

７１２　清酒の製造場における製造体験事業

別紙

１　特定事業の名称

７１２　清酒の製造場における製造体験事業

２　当該規制の特例措置の適用を受けようとする者

構造改革特別区域内において、清酒の製造免許を受けた者で、当該特区内に所在する当該特区の魅力の増進に資する施設内の体験製造場において、清酒の製造体験の機会を提供しようとする者

実施主体の氏名又は法人名：上川大雪酒造株式会社

既存の製造場の所在地：北海道上川郡上川町旭町 25-1

既存の製造場の名称：上川大雪酒造株式会社「緑丘蔵」

なお、当該事業者が本特例措置を活用した他の体験製造場を本特区内に設けていないことを深川市及び上川町として確認済みである。

３　当該規制の特例措置の適用の開始の日

当該規制の特例措置に係る税務署長の承認を受けた日

４　特定事業の内容

（１）事業に関与する主体

上記２に記載した者で当該規制の特例措置に係る税務署長の承認を受けた者

（２）体験製造場が設置される施設の概要

名　称：（仮称）上川大雪酒造「体験型ふかがわ醸造所」

所在地：北海道深川市メム 4558（拓殖大学北海道短期大学敷地内）

当該施設において実施される清酒の製造体験以外の概要：

・発酵等をテーマとしたワークショップ及び上川町の紹介

・構造改革特別区域内における水稲をテーマとした講義、稲作作業体験

・構造改革特別区域内における米穀関連施設の視察体験

その他：

体験製造場については、深川市にキャンパスを置く拓殖大学北海道短期大学の実験・実習農場を活用した「稲作作業体験」のほか、同短期大学に隣接する JA きたそらち農業協同組合の全国最大規模を誇る穀類乾燥調製貯蔵施設や低温倉庫、最新鋭の精米施設を活用した「米穀関連施設視察体験」との連携を図ることから、同短期大学の敷地内に開設する計画である。

当該施設の完成予定日：
2022 年 9 月 30 日

（3）当該施設が地域の魅力の増進に資すると考える理由

体験製造場の開設敷地となる拓殖大学北海道短期大学は、古くから深川市と関係がある。経営母体となる学校法人拓殖大学を創立した桂太郎（後の内閣総理大臣）が陸軍次官であった明治 21 年に深川を訪れ、国見峠から望んだその風景を称賛したという経緯が起点となって、昭和 40 年に発足した深川市長を会長とする大学誘致期成会が「まちの活性化策」として誘致運動に取り組んだ結果、翌年に深川の地での開学が実現した。

以来、同短期大学は拓殖大学の伝統である開拓者精神を継承した教育を実践し、時代を見据えた新しい農業に取り組む農業後継者や農業指導者のほか保育士・幼稚園教諭等を輩出し、深川市はもとより周辺自治体を含む北空知圏域における高等教育の拠点として重要な役割を担うとともに、37 回の歴史を重ねる学生たちの手により創り上げた拓大ミュージカル等の特色ある教育活動を通じ、地域独自の芸術文化を形成している。

平成４年には、教育環境のさらなる向上のため、深川市が支援する中でキャンパスの市内移転が行われた。この移転を機に、コミュニティ大学としての存在感がさらに色濃くなり、充実した大学施設を有効に活用しつつ、農場公開デー、農業セミナー、実験実習農場で収穫された農産物の安価販売等の市民に開かれた各種イベントの充実が図られ、市内外の多くの方が同短期大学を利用するなど域内の活性化に寄与している。

また、同短期大学の教員が講師となって年５回開催されている深川市民公開講座は、産学官が連携して、道内市町村で行われている様々な学習機会を体系化することにより、道民が自らの意思によって学び、自立した北海道の創造に寄与する人材を育成することを目的に設立された道民カレッジとも連携した講座となっており、上川町も含め多くの道民が地域の歴史や文化を学ぶ生涯学習の場ともなっている。

このように、同短期大学はまちの活性化策を契機に誘致されて以降、拓殖大学の開拓者精神を継承した教育により地域の芸術文化の形成や生涯学習拠点の機能を果たしており、深川市のみならず上川町も含めた圏域の歴史・文化の象徴である。そのキャンパスに清酒の体験製造場ができることで、更なる地域の魅力増進に繋がる様々な効果が得られると考える。

具体的な効果としては、体験製造場が農業専攻科を有する専門的な教育機関の中に開設されることで、既存の清酒製造場における商品の改良や研究開発にも繋がることである。体験製造場と既存の清酒製造場の連携が深まるこ

とにより、製造される清酒の一体的な良質化・ブランド化が図られ、上川町としても新たな特産品の製造、販路拡大や地域振興に繋がることも期待される。

このほか、体験製造場を、地元事業者が実施する修学旅行の農業体験プログラムの受入先として活用したり、拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科学生の農業関連カリキュラムとの連携や、両自治体の道立高等学校との「高大連携」の取り組みとして活用したりすることにより、農産物の加工・販売や観光産業の担い手等、６次産業化に関わる人材の育成にも寄与する。

以上から、当該施設に体験製造場を設置することにより、両自治体の地域の魅力の増進に資するものであると考える。

（４）清酒の製造体験事業の内容・募集人数

【事業内容】

〇対象者

・観光客

・修学旅行における体験プログラム参加者

・高等学校等の校外学習受講者

〇実施内容

・清酒製造の基礎講座

・清酒製造作業の体験

・専門的な官能検査を経験する利き酒実習等（成人のみ）

※各酒造体験プログラム１回あたり５名を上限、一日３回を上限。

※拓殖大学北海道短期大学施設を活用し、団体等を対象とした座学の場合は、１回あたり 100 名程度を上限。

また、事業の継続性を高めるため、拓殖大学北海道短期大学の農学ビジネス学科において新設予定の「日本酒学（仮称）」及び「日本酒製造実習（仮称）」との連携も図る。

（５）その他地方創生に資する活動の有無

深川市は米のほかリンゴの産地でもあり、平成 25 年に「ふかがわ果実酒特区」の認定を受け、りんごの微炭酸酒「ふかがわシードル」を商品化している。

上川町では地元産もち米を飼料に肥育した「渓谷・味豚」や「大雪そば」などの特色ある特産品がある。

これら両自治体の特産品と清酒をコラボさせる取り組みを進め、両自治体

の地域資源のさらなる高付加価値を図る。

（６）認定計画特定清酒製造者及び認定地方公共団体における経済的社会的効果の発現見込

上川大雪酒造株式会社については、高い清酒製造技術力を有し、首都圏からも取引依頼があるほどの実績を有する企業であり、このブランド力を清酒製造体験事業に活かして取り組むことにより、同社が上川町で運営する「緑丘蔵」を含めた雇用機会の創出や人材育成等の地域振興のほか、経営のさらなる安定化が期待できる。

自治体への効果としては、交通の要衝として北の玄関口を担う深川市が、道内初となる清酒体験製造場に集まる方を、北海道屈指の温泉地の上川町へ誘導することで、両自治体の観光入込客数の増加が図られ、経済の好循環が期待できる。

また、本特例措置の実施は、両自治体のほか、民間事業者、JA きたそらち、拓殖大学北海道短期大学など産学官連携で取り進めるものであり、地域振興という大義を理解しつつ、それぞれが役割を担うことにより、観光、小売・飲食サービス、農業、教育等広範な分野の経済的社会的な活性化に資するものである。

（７）実施結果の報告

毎年７月末までに前１年に実施した製造体験事業の結果を内閣府地方創生推進事務局に報告する。報告書には、実施日時、参加人数、実施内容等の製造体験事業の実施状況、その他地方創生に資する活動の有無のほか、認定計画特定清酒製造者及び深川市・上川町における経済的社会的効果の発現状況等を記載する。

５　当該規制の特例措置の内容

当該規制の特例措置により、構造改革特別区域内において清酒の製造免許を受けた者が、既存の製造場の所在地の所轄税務署長に申請をし、その承認を受けた場合において、当該特区に所在する当該特区の魅力の増進に資する施設内の体験製造場において、清酒の製造体験の機会を提供する場合には、当該特区内に所在する一の体験製造場と既存の製造場を一の清酒の製造場とみなし、当該体験製造場においても清酒を製造することが可能となる。

なお、当該特定事業を行う場合、認定計画特定清酒製造者が所轄税務署長の承認を受ける必要がある。既存の製造場と一の製造場にみなされた体験製造場

で清酒を製造する場合も、酒税法の規定に基づき、酒税の納税義務者として必要な申告納税や各種記帳義務が発生するとともに、税務当局の検査や調査の対象とされる。

本区域の各市町は、無免許製造（所轄税務署長からの承認を受ける前に体験製造場において清酒を製造する場合も含む。）を防止するために制度内容の広報・周知を行うとともに、認定計画特定清酒製造者が酒税法の規定に違反しないよう、指導及び支援を行う。